

変容を迫られる宗教概念

前回、人はだれもがシングル（単独者）であるという自覚の下に、宗教的な意味での新たなつながり（縁）をつないでいくことは可能かという問題提起を行った。

単独者として生きる人は、その内面性においてなんらかの宗教性が存在することに気づいている。それは超越者とのつながりの感覚である。このつながりの中で、人は真に自己自身になることができるし、自らの人生を生きる活力も生まれてくる。

超越者とのつながりに関して内面性が豊かな者であれば、お互いにそうした人間同士として形成できる関わりも充実したものになりうる。宗教の役割は、まさにこのような縁を人々の間に形成し、それに力を貸すことにある。

ここで大事な視点は、人がそれぞれの仕方での自らのシングル性（単独者性）を自覚し、その上での他者との神秘的なつながり（縁）に気がつくことによって、実はだれもが宗教的存在になりうるということである。そのように考えていくと、宗教の概念にも変容が迫られてくることになる。

特定の宗教を標榜していなくとも、深い内面性・超俗性を感じさせる人がいる。とりたてて宗教的な勤行や修行はしていなくとも、その生き方において求道的な人も少なくない。救済について声高に説教しなくとも、社会のために黙々と尽くしている人は無数に存在する。そうした人々は、自ら意識しているか否かを問わず、じっさい宗教的な人なのである。

彼らと、単に宗教稼業をやっているだけの人と比較してみたら、一般の人々の目にどちらのほうがより宗教的に映るだろうか。職業的宗教者でなくとも、人はじゅうぶん宗教的でありうるし、宗教家の看板を掲げていても世俗的な人はたくさんいるのである。

無所属の宗教としてのスピリチュアリティ

こうした考えが成り立つ前提は何であろうか。思うにそれは、信仰は個人において成立しうるもので、特定の宗教に所属することで信仰者になるのではない、というところにあるのではないだろうか。

現代人は決して宗教心を失ったわけではない。特定の宗教に拘束されたくないだけである。人々が宗教を警戒するのは、宗教者がアプローチしてきたとき、同じ宗教教団への「所属」を迫ってくるからである。人々は自由な立場で信仰をしたい、宗教的には無所属でありたいのである。

そうした動きの現われとして、昨今のスピリチュアルブームを位置づけることができるだろう。ある意味で、宗教教団の拘束から解き放たれた自由な宗教性がスピリチュアリティであるとも言えるのである。それは特定の宗教の回路を通さず、自分の中で超越的なものと何らかの形で神秘的・人格的につながることを指す。

いわゆるスピリチュアルブームにはかなり怪しげなものも少なくないが、公平に観察すれば、終末期におけるスピリチュアルケアのほか、日常的にも各種セラピーやセルフヘルプ運動、またエコロジーの場面などでも体験される癒しや救いの自己物語として語られるものである。それはいわば「無所属の宗教」

なのである。

スピリチュアルブームが静かに浸透しつつある現在、人々の側でスピリチュアルなニーズがあっても、特定の宗教はお呼びでないということになってしまう。人々が宗教の勧誘に対して、「宗教は結構です」とか「宗教は間に合っています」と断るのはなぜだろうか。いったん宗教に入ったら止められない（止めさせてもらえない）、だから最初から近寄らないということもあろう。

しかし、そうした消極的理由もさることながら、昨今のスピリチュアルブームの情勢に即して言えば、人々は自らの心や魂の救済や癒しは自前でやることのできるし、それでもう十分だと思っただけである。宗教関係者は、そうした傾向を慨嘆したり、スピリチュアルなものに「はまる」人々のことを批判するが、時代は確実に変化してきているのである。

世俗的とされていた領域に、実は深い宗教性が潜んでいたりする。それがスピリチュアリティの本質なのだ。それゆえ、宗教と世俗という聖俗分離を前提とした従来の宗教概念では、新たな宗教的可能性を開拓することはできないのである。

新たな宗教的人間関係の模索

人々の間にそうしたメンタリティが広まってきた以上、宗教者の側もまた従来型の布教伝道とは異なるアプローチを取ることが必要になる。人々の救済を進めるにあたって、自教団への「所属」を求めた発想一点張りから、脱皮していくことも考えてよいのではないだろうか。少なくとも“縁づくり（支縁）”の営みは、そうした自己への同化型仲間作りではありえない。

このような“縁づくり”の営みにあつては、宗教者がなによりも実存的な単独者としてスピリチュアル（精神的＝霊的）に独り立ちしているかどうか問われてくる。その上で、自ら単独者として自覚した者相互で人間的なつながり（縁）を形成するのである。縁には、血縁や地縁、社縁や職縁、友人や趣味などの縁だけでなく、宗教的縁があり、それは共にスピリチュアルに成熟した人格的相互関係として存するものである。教団への「所属」には直接つながらなくとも、そうした縁はやはり宗教を通じた縁なのである。

ここで宗教者に反省的に問い返されるのは、宗教的な人間関係論の課題である。聖俗概念を“脱構築”した宗教性、すなわちスピリチュアリティの普遍性を前提とするならば、宗教教団の中でも従来のあり方が通用しなくなることも予想される。

スピリチュアルな共同体は、共に単独者としての精神的＝霊的自覚を持った者同士の縁で結びついたあり方を取る。それは開かれた共同体である。スピリチュアルな成熟において、一般信徒（信者）が指導的立場にある者を追い越し、高次元の境地に到達することもあるだろう。その中でより信仰を深める者もいる一方で、そこから一人立ちしていく者も出るかもしれない。

それを可能にする根拠は、宗教者であることは宗教的地位や肩書にあるのではなく、人はだれもがその内面的本質において宗教者なのだということにある。そうした互いに自主独立した人格的な交わりこそ宗教的な縁であり、その縁の中の縁とも言うべきものが宗教的共同体としての宗教教団なのである。